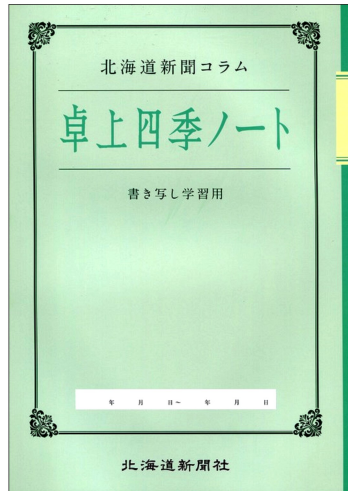


始めてみませんか? 「書き写し学習」卓上四季ノート

「卓上四季ノート」とは? 北海道新聞の1面に掲載されているコラム「卓上四季」を書き写すノートです。分からない言葉や漢字、天気や気になるニュースも記入できます



卓上四季ノートの効果

- ☆認知症予防のトレーニングになります
- ☆忘れかけた漢字や言葉を思い出せます
- ☆毎日の社会情勢や出来事を知れます
- ☆文章を読み取る能力が身に付きます

1冊162円(税込) ※1冊で約1ヶ月使用できます。

ご希望の方は、お気軽に販売所までお電話ください。
※在庫がない場合は、お取り寄せ(2~3日)となります。
※代金(税込162円)のお支払は商品お届け時になります。



先日、町公民館で行われた「JR根室本線の早期災害復旧と路線維持を求める十勝集会」に参加しました。
富良野・新得間の根室線の廃線・バス転換問題に関して、金田副町長を始め多くの方から早期復旧と路線維持に向けた発言がありました。

中でも高橋十勝町村会長(本別町長)の話が印象に残りました。
「根室線の問題は、新得、南富良野だけの問題ではない。北海道全体の問題である。道東と道北を結ぶ鉄道を地方創生のために分断させてはならない。」
復旧した暁には稚内・旭川・富良野・帯広・釧路・網走を結ぶ道北道東周遊の豪華観光列車の運行もできる」と訴え、夢も語っていただきました。
その時、「線路は続くよ」の歌が思い浮かびました。



「線路は続くよどこまでも」

新得町役場屈足支所長 中村吉克



「線路は続くよどこまでも」野を越え、山越え、谷越えて……僕達の楽しい旅の夢つないでいる。」
とありますが、線路には人と人をつなげたり夢を広げる力があるのですね。先人達が苦労してつないできた財産を赤字だけの理由でなくすことにはないようになりたいものです。
人間社会も同じで、人と人がつながり合うには山越え谷越えと努力もしなければなりません。家族、職場、地域等でお互いにつながる事で幸せや夢も広がりますね。
これはいつの時代になっても変わらない事だと思います。
さあ、お祭りの季節の到来です。
人と人がつながるには売っての付けのイベントが続きますね。
この夏には、たくさんの方とつながって大いに笑って、夢を語り合いたいです。



無送料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実に取り寄せています。
今読みたい話題作! 欲しい本をお取り寄せ!

せ!
気軽にお問い合わせください。
通販は送料が掛かりますが当販売所は無料です。
※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

いちいち屈足駐在所



鈴木進司 巡査部長 No.24

「特殊詐欺被害防止」

屈足地区で「総合消費料金に関する訴訟最終告知のお知らせ」というハガキが回っているのをご注意願います。
その内容は、「民事訴訟最終通告書」「以前貴方が契約された会社に対して未納金あるいは契約違反に当該会社が管轄裁判所に訴訟手続きをされた事を報告致します。」
当該会社、訴訟内容につきましては担当職員にて受け取りますが当センターは原告側から最終勧告並びに御本人様と内容の正当性を確認する機関になります。
当センター貴方に対して訴訟を起こしているのではありませんので予めご了承下さい。
また、悪質業者によるしつこい電話勧誘、おしつけ商法等のご相談もお受け致しています。・・・云々です。今回は、相談窓口という名目で相談として連絡下さい。という内容に変更されています。
このハガキも詐欺のものなので家に届いた場合は、その場で破り捨てるか警察にご相談下さい。



ねっとわーく屈足



ねっとわーく屈足電子版
ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。
ツイッターも屈足の話一杯毎日更新!

じじーakira1942



ポケットブック次号予告
「自分でできる肩・腰・膝ケア」お楽しみに。

北海道は国内生産量1位のブロッコリー王国。下ごしらえが簡単で彩りも良く、栄養が豊富な緑黄色野菜のサラブレッド的食材のブロッコリー。味にクセがなく他の食材とも相性が良いため、和洋中さまざまな味付けで楽しめるのも魅力のひとつです。栄養や保存方法、下ごしらえのコツをばじめ、ボリュームたっぷりなおかずやサラダなどバラエティー豊かなレシピの数々を紹介いたします。



道新六月号
ポケットブック
の御案内です。

連続小説

電池のきれた兜虫

赤池 武臣

<4>

典子は、当てにしていない小金が入ると、いつも、色々な玩具を買ってきた。
玩具を買い与えることによって、少しでも自分の罪悪感から逃がれようとしているようだった。
またそれだけが典子の武彦に出来る、たった一つの心の慰めだったのかも知れない。
玩具の中には、舌を噛みそうな名前の宇宙人や、ねじを巻くと両手でおいでおいでをしながら歩く人形、けたたましい音をたてて荷台の上をぐるぐる、光を放ち回転する鉄砲、その他にも色々あった。
武彦は、その時その時の気分支配されながら、遊び疲れるまでそれらの玩具で遊んだ。
腰に大きくまわりつくオムツが痛々しい。
それでも、武彦は泣くことを忘れ、相手役の玩具の世界に、ひたすら溶けこんでいた。
酔わないときの典子は、時計が午前零時を知らせる頃帰ってきた。だが一時二時になって、ようやく帰ってくるよときの典子は、たいいてい深酒を浴びていた。
深酔いをしているときは、機嫌のいいときと悪いときとははっきりしていて、自分に小言を言っている泣きわめか、執拗に武彦を抱き上げ、何時間でもあやすか、いずれかの行動を取るのが常だった。
武彦は典子が鍵を使いドアを開けようとする、その微妙な音の違いで、全てを判断するまでになっていた。
時間がかかり、音が荒々しいときは、いつも布団に潜りこみ、息をひそめた。典子のドロンとした眼で睨まれるのが嫌だった。
それとは反対に、すんなりドアが開いたときは、飛んでいきたい気持ちを抑え、神妙に坐って待ち、典子が声をかけるまで黙って待っていた。
そんな毎日の繰り返しの中で、武彦は日々育っていった。
だから武彦は、典子が家に居るときも、表面はほとんど生活の中に変化はなく、いつも自分の殻にとじこもっていて、よほどのことがない限り、典子が呼んでも、声を出して返事をしたことはなかった。

つづく